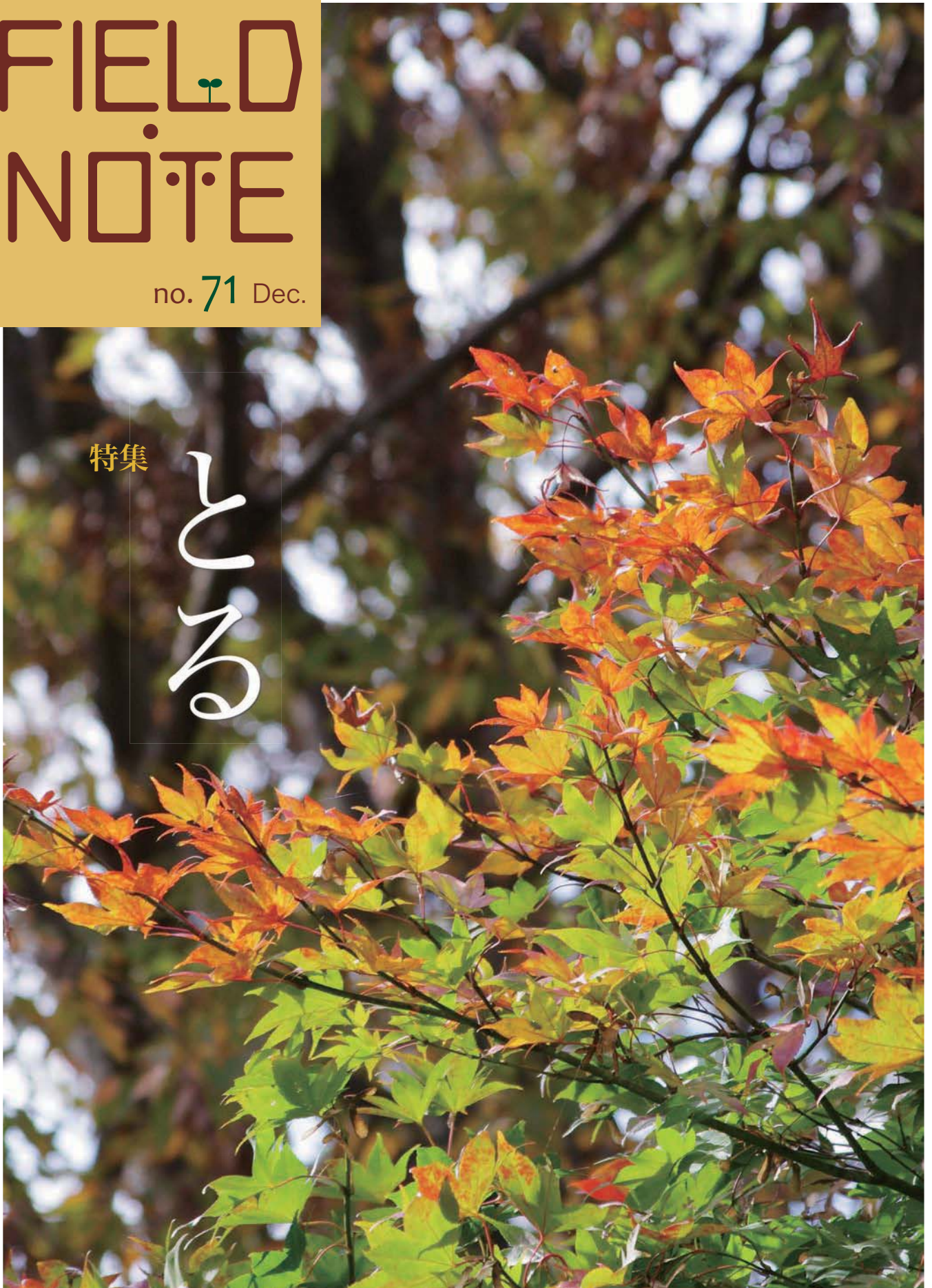


FIELD NOTE

no. 71 Dec.

特集

とる





本学キャンパス (11 月 3 日撮影)

CONTENTS

表紙写真：西教生

ギャラリー写真：崎田史浩

特集

04

とる

06

ひろいもの 第2回 秋の実探検隊

08

小さな博物館づくり ― 食べた魚の骨格標本 ―

10

暖を取る ― いろいろ端の記憶 ―

12

ギャラリー 「秋を撮る」

14

フィールド・ミュージアムのたのしみ 第15回

「ヒヨドリ大切な仕事」
「モグラとテントウムシ」

18

エゴマのある暮らし

20

「つくる」をみつめる 第2篇
型のない作品

23

おわりに

24

起き上がる朝

26

先生を訪ねる 第3回「道を究める人」

30

記憶のカケラ

32

インタビュー 南都留森林組合 前編
「林業を日のあたる産業に。」

34

おむすび屋さん

36

思い出をあつかう人

38

身近で自由にふるまう生きものを見守る

40

フィールド暦

41

センサーカメラが写した動物たち

42

大桑山だより うら山図鑑 第12弾「魚類」

44

Field Note News

46

編集後記

秋を「とる」



『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。



特集



とる

冷たくなりはじめた空気のなか外を歩くと
少しずつ色づく景色に、
足元に落ちているまあるい木の実に、
秋のおとずれを感じます。

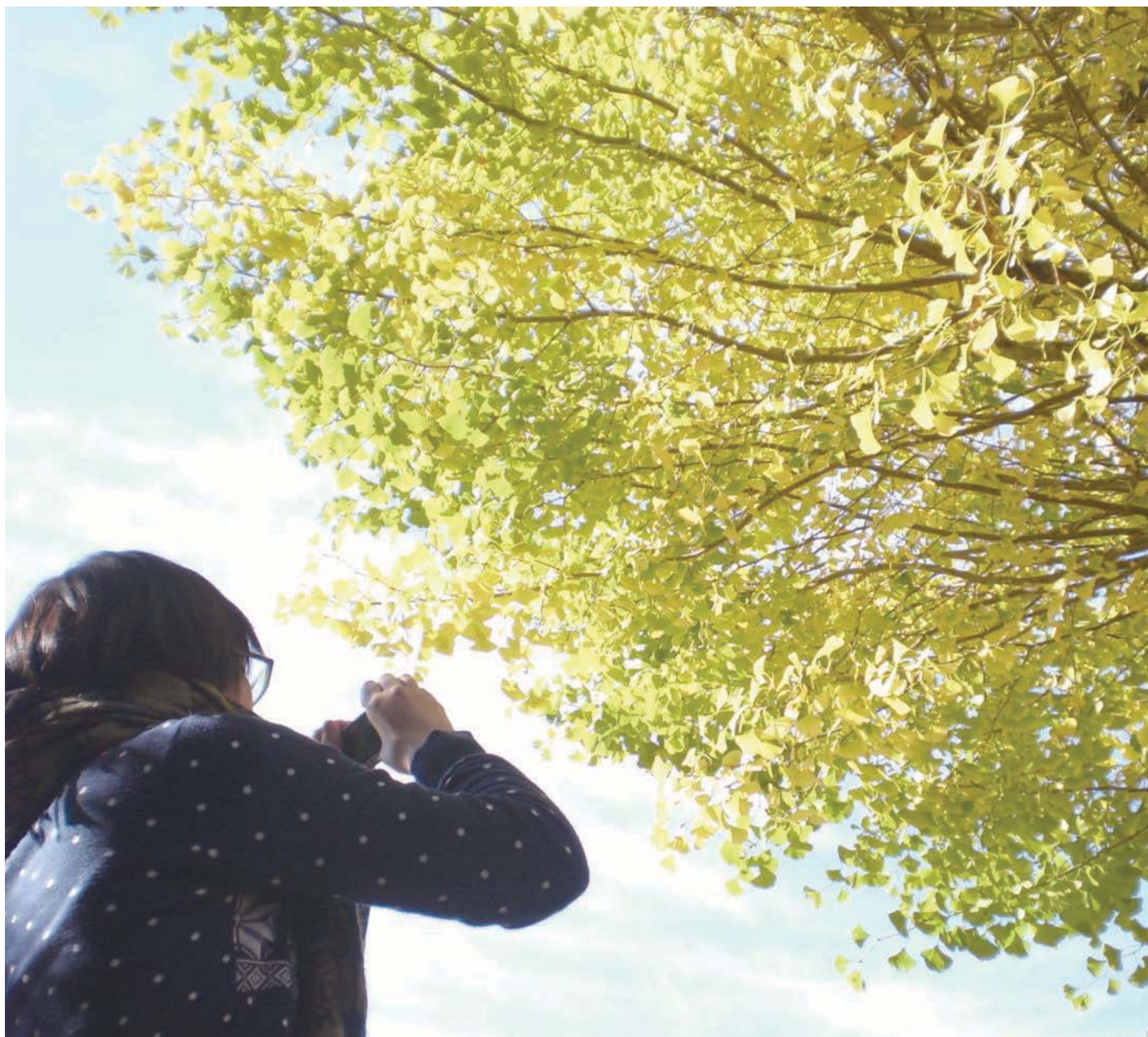
この 秋という季節を
私たちに どうかとらえるか。
そう考えたとき、
「とる」という言葉が浮かんできました。

山の豊かな実りを 採る
朝夕に暖を 取る
鮮やかな風景を 撮る
季節の移ろいを記録に 取る

じっくり考えてみると、
いろんな「とる」があることに気づきます。

さまざまな角度から注目することで見えてくる
秋の姿を、「とる」という切り口から
お伝えします。





いろいろな「とる」

6 ひろいもの 第2回
秋の実探検隊

8 小さな博物館づくり
—食べた魚の骨格標本—

10 暖を取る
～いりり端の記憶～

12 ギャラリー「秋を撮る」

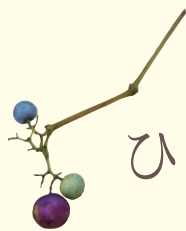
14 フィールド・ミュージアムのたのしみ
第15回 「ヒヨドリの大切な仕事」
「モグラとテントウムシ」

18 エゴマのある暮らし

20 「つくる」をみつめる 第2篇
型のない作品



2 アオツヅラフジ。3 ミツバアケビの実と種子。採るのにはためらいがあったが、初めて食べることができた。ぎっしり詰まった種子のまわりのねっとりした白い部分をしゃぶると青く甘い味。まとまってついている3つの実のうち、ひとつの実から種子がこれだけ採れた。のこりの実はホワイトトリカーに漬けてみる。どんなお酒になるのか楽しみだ。4・5 クサボケとカラタチの実。道路脇の植木から採る。カラタチの実の表面にはうぶ毛が生えていてやさしい触り心地がする。クサボケの実はいびつなカタチをしている。採って編集室に置いておいたら、濃い甘い香りが漂ってきて驚いた。数日部屋のなかはよい香りがしていた。6 ハナミズキ。7 アブラチャンの青い実と茶色く熟して落ちていたもの。8 ヤブツバキ。採ってしばらくすると、頑丈な殻が割れて種子がでてきた。9 アカマツの球果。10 クリ。うぐいすホール横、山へはいる小径の入口付近でたくさん見つける。森の生きものたちの食糧になるのだらうと思いつつ、つやつやしたクリの実が宝物を見つけたような気分で、ひろい集めてしまう。11 イヌツゲ。12 カラマツの球果。13 ガマズミ。道路から山を見上げると赤い実がどっさりなっているのが見えた。14 モミの若い球果。
／題字左：ノブドウ（10.04 やまびこ競技場付近） 題字上：カラスノゴマの莢と種子（11.02 編集室前ビオトープ）



ひろいもの

2. 秋の実探検隊

ひろったものをそのままのかたちで残しておきたい。
並べてみるとどんな世界がみえてくるのでしょうか。
わたしの「ひろいもの」をご紹介します。

香西恵（社会学科3年）＝文・写真
水野孝英（社会学科1年）＝写真



10月1日、編集部員5人で大学の裏山を歩きました。
かごいっぱい秋の実りを見つけない。
まちはまだ、夏のなごりも感じられたこのころ、
山には一足先に秋がやってきていました。

1 ホオノキの実と種子。ホオノキのものとわかる、大きな枯葉が積もったところでひろう。すーっとする独特の強いにおいがする。殻からはずすのは案外むずかしく、種子はしっかりと殻に守られていた。

小さな博物館づくり―食べた魚の骨格標本―



自分の小さな博物館がほしいと思った。きれいに資料が並んでいて、あとで自分の勉強にも使えるような。夏はセミの抜け殻を集めて、どのセミか調べて、小さな標本箱に並べたこともあった。セミの抜け殻が姿を消した秋は何をしようか。そう考えていたときに、「食べた魚の骨とかはどう？」と勧められた。それはおもしろそうだ。最初はすごく単純な理由で始めた魚の骨格標本づくり。思っていたより難しく、そしてとても面白い作業だった。

持田睦乃（社会学科3年）＝文・写真



上からサンマ、タイ、アジ

魚

の骨を取るなんて、やってみるまでは簡単なことだろうと思っていた。だがじつさいは文字通り、骨が折れる作業だった。魚の骨というのはとてももろくて、丈夫そうに見えても少し乱暴に扱うとすぐに折れてしまう。

サンマ、アジ、タイと三回挑戦したのだが、サンマとアジは身をほぐしていくうちにどんどんとカタチが崩れていってしまう。途中でまきれいに残せていたアジの頭部も最後の洗浄のときにぼろぼろと崩れてしまった。

三回目、今度こそは頭部だけでもきれいに残そうと気合いを入れて買ったタイ。骨が硬そうで、サンマやアジに比べて頭も大きい。意気込んで作業を始めたは良いものの、やはりタイもサンマやアジと同じく、少しでも気を抜くとすぐに骨がぼろっとかけてしまう。それでもどうにか頭部をきれいに残すことができた。きれいにできた標本はこれからさらに洗浄を重ねて、標本箱に並べてやつと完成になる。もう少し時間がかかりそうだが、でき上がりが非常に楽しみだ。

ちなみにどの魚もほぐした身はしっかりといただいた。どれも脂がのついておいしく、

骨格標本づくりの工程



1
骨格標本にする 15cmほどのタイ。買うときにワタぬきをしてもらおうと作業しやすい



2
ひれが取れてしまわないようにガーゼでくるんで、沸騰したお湯で完全に火が通るまで湯がく



3
先の細い箸やピンセットを使って身をほぐしていく。ピンセットも届かない部分は爪楊枝で身を取る



4
取れるだけ身を取った状態。この状態から洗浄する。今回は入れ歯用洗浄剤に浸けて1週間ほどようすを見た後、薄めのキッチン用漂白剤に一晚浸けた



5
洗浄を重ねてほぼ身が取れた状態。まだ脂が残って黄色みがかっている。これからまた漂白剤に浸けていく予定

湯がいた後そのままお醤油だけで食べたり、ほかの料理の具材にして食べたりした。

標本づくりをしているあいだ、ずっと考えていたことがある。最初はただ本当に、「自分だけの標本箱、博物館がほしい」と思っていただけなのに、何でこんなふうにじつくりと、一つひとつ丁寧に観察しているんだろう。魚の骨なんていつもは捨ててしまうところなのに、何でこんなに大事に思えるんだろう。なんでもっと簡単な、ただ拾ってきて並べれば良いだけのものを選ばずに、私は「魚の骨」を選んだんだろう。

魚が身近だったから、誰かに勧めてもらったから、というのも確かにある。だけどきつとそれだけじゃなくて、私自身ももっと「魚」を自分の近くに引き寄せて考えたいと、心のどこかで思っていたからだ。セミの抜け殻を集めているときにも、同じ種類のセミ同士に見られる個体差などから、身の回りにいる生きものの多様さに驚いた。そして集まったものをきれいに並べて残しておくことで、残したものの方が比較対象になり、以後の自分の発見

につなげていけることに感動していた。何げなく通り過ぎていってしまうもの、捨ててしまふもののなかに、自分が生きものをより深く考えるための一つの基本となるような「定規」が隠れていることに気づいたのだ。

食べているときには「うっとうしいなあ」と思う魚の小骨も、標本づくりを一度やってからはなんだか大事に思える。いつも何気なく生活の片隅にある、価値があるのかどうか目では分からない小さなもの。でも丁寧にじっくり観察すると、細かな部分や個体差など、知らなかった部分が少しずつ見えてきて、「どうしてこんな形なんだろう」「どうしてこんなふうに違うんだろう」と、新しい疑問が生まれていく。

私は標本づくりを通して、身近なもののかかわりから生まれてくる疑問を、ちゃんと見えるように残しておきたいと思うようになった。私がつくった骨格標本は、今後私が魚を見るときに、私のなかの「定規」として機能してくれるはずだ。比較してじっくり見る。その面白さと発見の多さに、改めて気づいた経験だった。

昔はどのように暖を取っていたのだろうか。家のなかに造られた「いろり」が、おもに暖房の役割を果たしたことは知っていたけれど、具体的にどれくらいの大きさでどんな木を燃やしていたのか、よく考えたら知らないことばかりだった。10月15日、都留市法能にお住まいの荻窪久夫さん（60）に、いろり端で生活したころの話をうかがった。



取材風景。丁寧に教えてくださる荻窪久夫さん
撮影：前澤志依（2011.11.19）



「ヤセンマ」（ショイコ）
・大人用と子ども用があった

暖を取る

いろり端の記憶

都

留市大野に細野という地区がある。荻窪さんはもともこの地に生まれ育った。法能に新しく家を建てたのは15年ほど前のことで、当時住んでいた家屋は今でも細野に残っている。

家にいろりがあったのは、荻窪さんが小学生のころ。したがって、話は50年以上前にさかのぼる。

暖を取る、その準備

寒くなってくると、炊事や風呂焚きに加え、暖房のために薪を多く使うようになる。本格的な冬を迎える準備は秋口から始まった。

「秋になると、山に薪を拾いにいったね。どこの家もそうだった。それは家族でいかないで、子どもたちが連れ立っていったよね」。

薪拾いはおもに子どもたちの役割だった。学校が終わったあとや休日になると、兄弟や近所の友達と一緒に山に入った。鉋や鋸を持ち、拾った薪を積んでくるための「ヤセンマ」（ショイコ）を背負っていく。細野では「木伐りに行く」と言い慣わしていたが、じつさいは枯れ木など落ちている木を拾い集める作業だ。拾う場所は自分の所有地を含め、ど

この山にも自由に入っていた。落ちている枯れ木については、それを拾う子どもをとがめる人はいなかったという。

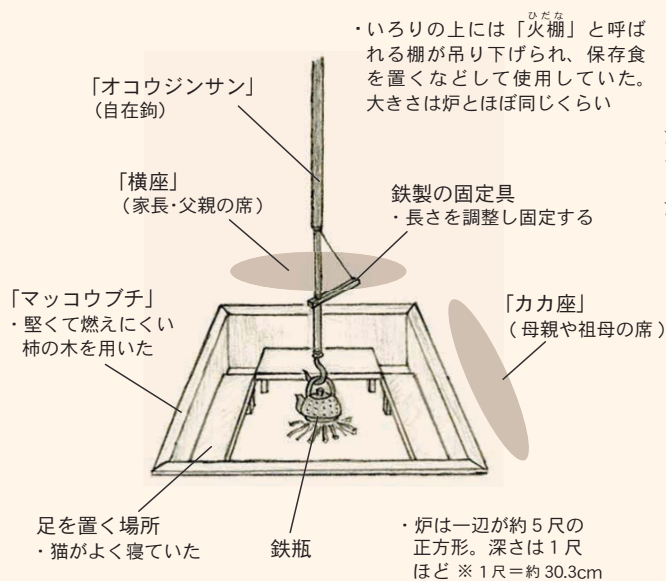
いろりで燃やす木は、針葉樹でいえばスギやアカマツの枝、広葉樹ではケヤキ、シデ、コナラ、カエデなどが優れている。また、アブラチャンなどの灌木も良い薪になった。逆に、クリやクルミなどは火力が弱いため、いろりで燃やすには適していない。

「ヤセンマ」に積んで持ち帰ってきた薪は「シタネ」（家の軒下）にうずたかく積んでおく。冬が近づけばどこの家にも見られる光景だった。荻窪さんが懐かしそうに少年期を振り返る。

「子どもたちは競うようにして木伐りに行って、自分のシタネにどれくらい木が積んであるか、自慢みたいなことがあった。そんなことが楽しみでもあったね」。

遊び盛りの子どもたちにとって、薪拾いは面倒な手伝いではなかったかと疑問に思っていたが、そうでもないようだ。競う楽しみや張り合いをもって山に出かけていく子どもたちの姿が、目の前に浮かんでくるような気がした。

いろり端の略図



冬になると、亡父・^{よじ}祉さんが炭を焼いた。当時、林業と養蚕で生計を立てていた生家にとって、炭焼きは冬のあいだの貴重な収入源となった。いろりでは薪とともにこの炭も併用する。もちろん伐採した木から薪を得ることもあったが、生木を伐って薪にした場合は炭と同様、おもに谷村などの町場に販売することが多かった。だから燃やすにしてもその売れ残りを使う程度で、暖を取るにも炊事をするにも拾ってきた薪だけで充分に足りていたそうだ。

いろりは「ヒジロ」と呼んだ

「昔は『いろり』とは呼んでなかったね」。

荻窪さんがそう切り出した。どうやら、その土地の呼び方があるらしい。

「この辺では『いろり』なんて言わないよ。『ヒジロ』(火代) っていうんだよ。いろりという言葉は後から知ったんだよね」。

いろりは、どこでも一様に「いろり」と呼ぶものだと思っていたので、正直とても驚いた。ほかに自在鉤を指す「オコウジンサン」(お荒神さん)という名前や、さきに触れた「シタネ」など、聞きなれない言葉がいくつも連なる。そのたびにどんな字を当てるのかを尋ね、ときに一緒に考えながら、話題はさらにいろり端の思い出話へと進んでいく。

「秋から冬にかけてねえ、ヒジロに火が入ったってのが一つの喜びだった気がする。ヒジロで(薪を)燃し始めて、ああこれであつたかくなるなって……」。

じつと一点を見据えながら、少しずつ記憶を手繰り寄せるように荻窪さんは話を続ける。「まあ、懐かしいよねえ。当時はテレビもなかったし、ヒジロを中心に一日の話をした。

昔はそんなに話すこともなかったけどね」。

加えて「もう50年も前のことだから、あんまり覚えてないけど」とはいうものの、いろりを囲み箱膳で食事したことや、保存食としてヘビや川魚を焼いたこと、いろりのふちで寝ていた猫がよく炉のなかに落ちて火傷した話など、数々の思い出にあふれている。静かな面持ちでゆっくりと話すその視線の先に、荻窪さんはいろり端で過ごしたころの風景を眺めているようだった。

いろりはその後、炭の掘り炬燵に姿を変え、ついで炉の上には板が張られて電気炬燵を置くようになった。今となつては薪が燃え、鉄瓶から湯気がたつ往時の姿を目にすることはできない。けれど、当時を知る人からじかに話を聞くことで、いろりがどのようなものだったか、いかにして暖を取っていたのかをありありと思ひ浮かべることができた。これは、ただ史料をひもとくだけでは得られない貴重な経験だったと思う。薪拾いにいく子どもの気持ちや、火に当たったときの感情といった実感をともなう記憶が、かつての生活の一端をより鮮やかに描き出してくれた。



崎田史浩

2011.12.10 上谷

朝8時、霜がおりたカエ
デを発見。早起きのささ
やかな喜びです。



香西恵

2011.10.4 中屋敷

見上げると、アケビの実が
たくさん。手を伸ばしても
ギリギリ届きませんでした。



石川あすか

2011.10.23 田原

夕日に透けた羽の青がき
れいでした。写真には写
らなくて残念です。

ギャラリー

秋を撮る



西教生
2011.9.28 川茂
オニグルミの実が、
秋風に揺れていました。



西教生
2011.11.16 十日市場
ススキは草原の貴公子
です。



香西恵
2011.10.1 尾崎山
はじめはクルミかと思いま
したが、よく見ると、種が
たくさんありました。おそ
らく、アケビでしょう。

崎田史浩
2011.11.12 盛里
丸く引き締まったカキに
まぎれるパッタを撮りま
した。



ヒヨドリの大切な仕事

●文・写真 西教生（本学非常勤講師）

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。



ナツグミの枝に止まったヒヨドリ

秋

の山にはいろんな木の実がなっています。実の色はさまざまで、色とりどりの紅葉も私たちの目を楽しませてくれます。これらは自然の色彩の複雑さ、精巧さを考えるきっかけになるのですが、いくつかの木の実を見ていくと、赤いものと黒っぽいものに大別できそうです。ガマズミやアオキは赤色、クロモジやイボタノキは黒色というように。さらに、このような実は鳥類が丸飲みできる大きさです。鳥には歯がないため、食物を丸飲みします。今回は、鳥類と樹木の見事な関係を見てみましょう。

キャンパスを歩くと、周辺に親木がないのにアオキやガマズミ、イヌツゲなどの稚樹（子ども木）の見つかる場所があります。おそらくこれは、鳥に食べられた種子がフンとして落とされ、発芽したものです。

私たちの周りに暮らしている鳥類の多くは、食べた実をほとんど消化せずに排泄します。親木の下に落ちた実は、光の条件などの影響で大きく育つことは難しいでしょう。しかし、鳥に食べられることで親木から離れた場所に運ばれると、定着できる可能性が高くなります。木は果肉の部分を鳥類に提供して、

実（上）と稚樹（下） * 左からアオキ、ガマズミ、イヌツゲ



種子を散布しているのです。都留市の種子散布の担い手はヒヨドリとメジロ、ジョウビタキなどですが、なかでもヒヨドリが一番よく貢献していると思われます。

上の写真のイヌツゲとガマズミの稚樹は、コミュニケーションホールの北側にありました。北側にはカシ類が植えられています。このカシ類に止まった鳥が落としたフンのなかに種子が入っていたのでしょうか。また、種子はフンとして落とされる以外に、吐き戻しによって散布されることもあります。

このような鳥類の種子散布からキャンパスの植生を見ていくことは重要です。コミュニケーションホールの北側では、キャンパスには生えていない植物の稚樹もあります。かなり遠くから運ばれてきたものと思われますが、これがもし園芸種でしたら問題です。じつさい、大学の裏山では園芸種の稚樹も見つかっています。こうした意味でも、いま、どのような稚樹があるのかを記録しておく必要があります。稚樹の記録を取ることと並行して、木から種子を採集するとより一層理解が深まります。たとえば、アオキの実ほとんど果肉がないため、鳥類にとっては食べても

栄養価は低いでしょう。クサギは花が咲いた後にガクが赤くなり、中央に黒っぽい実をつけ、この配色で鳥類をおびき寄せているといわれています。

目の前の道をリスが横切ったとか、セイヨウタンポポで吸蜜するツマグロヒヨウモンを見たとか、散歩を続けているとこうした「わかりやすい出会い」がよくあります。けれども稚樹の場合は、少なくとも稚樹は見え隠れしませんので、そこにあることに気づかないといけません。気づいた後の噛みしめるような楽しさ、そこで発芽するに至った過程を想像する時間。物事が直接見えなかったために、その経過を考える余裕が生まれます。

いつもの風景のなかに、ふだん見過ごしがちなものを見ること、思いを巡らすことは、身の周りの自然とは何かを察知することでもあります。ヒヨドリの大切な仕事は、自分が生きることによって、ほかのものも生かしていること、といえるでしょう。本当の共生とは、お互いが無意識のうちにしている、このような行為なのではないでしょうか。

モグラとテントウムシ

フィールド・ミュージアムでは、いまの自然の動向や人びとの暮らしを記録にとり、残すことも大切な取り組みの一つと考えています。生きものの暮らしからもその時の私たちの自然との関わりがありようが見えてきます。また多くの人の目を通して記録していくことは、より注意深く地域を観察する契機になります。今回は、本学の2号館に毎年越冬に訪れているテントウムシについて泉桂子氏に寄稿していただきました。また砂田真宏氏にはキャンパスのモグラとの遭遇について報告していただきました。



秋から冬にかけて草原などで見られるモグラ塚。モグラ1匹で、1年に数百キログラムの土を地中から地表にかきだす。モグラはトンネルを掘り、地中に空気を入れ、土を地表に出してかきまぜる働きもしている（静岡県朝霧高原にて）



モグラが生息していたキャンパスの広場。モグラ塚が見える（2011年11月13日）



1匹目のモグラ。コンクリートに行く手を遮られ移動できない（2011年11月13日）

11月13日、本部棟前の広場を歩いていると、落ち葉のガサガサという音が聞こえてきました。側溝（そくこう）のなかからです。おそろおそろな音を覗くと、全身を毛に覆われたのがいます。私はすぐにそれがモグラだと分かりました。8月にも自然科学棟の前でモグラを見つけていたからです。ふと顔を上げるとコンクリートの隅にもう1匹。それらは今年、2匹目と3匹目の出会いとなるアズマモグラでした。

毎年冬になると、この広場にはモグラ塚という小さな山がたくさんできます。私にとってモグラは、モグラ塚を通して間接的にしかその存在を知ることのできない生きものです。なかなかお目にかかることはありません。4ヶ月のあいだの3匹のモグラとの出会いは本当にうれしいことです。しかし、いつもは地中で生活しているモグラがなぜ地上に出てしまうのでしょうか。3匹のモグラを見ていると、コンクリートの上に迷い出たり、側溝に落ちたりすると元いた場所に帰るのは容易ではないようです。コンクリートと土の境に沿ってモグラが地面を掘った跡がありました。思うように進めないモグラはうつかり地上に出てしまったのでしょうか。

このモグラとの出会いは、直接見ることでできなかった生きものと出会えた貴重な経験でした。生きものがすぐ隣で生活している、私たちと生きものとの距離が近いキャンパスだと感じた反面、人工物に阻（はば）まれた生きものの姿からこれからのように付き合っていくべきか考えさせられました。

（砂田真宏 初等教育学科3年）

テ

ントウムシ、レディ・バグ。なんとか
わいらしい響きでしょうか。古くか
らこの虫が、幸運や幸福の象徴とされ、人々
に愛されてきたのは、鮮やかで愛らしい前羽
の模様、せわしく動く6本の脚、光のほうへ
飛び立っていく力強さだけでなく、生涯にわ
たつて万にわたるアブラムシを捕食し、地域
の農林業や景観維持に大きな役割を果たすこ
とが人々に知られていたからでしょう。

11月12日土曜日、忘れ物をして学内に立ち
入った私は視界の濁りと化学薬品の刺激臭を
感じ、心がざわめきました。構内の壁面・天
井にいたテントウムシに起こったことが想像
できたからです。明くる月曜日の14日、2号
館ではおびただしい数のテントウムシが死
亡、または運動能力を奪われていました。下
の表はその数の一部です。

益虫と害虫の境界線を人間が引くことには
批判もあります。しかし、野菜を食べない人、
木を使わない人、みどりに安らぎを覚えな
い人は居ません。その基盤は生物多様性に
あるのです。

「3・11」が私たちに提起したのは、一瞬
にして多くの命が奪われた悲しみ、命はすべ

て皆尊いとこれまで思い込んでいながら、関
東に住む私たちと福島の人々のあいだ、ある
いは去りゆく命と育ちゆく命のあいだに厳然
たる差別が存在するという事実でした。身近
にある小さい命に私たちは共感し、共存する
ことができるのか、その想いで寄稿しました。
(泉桂子 社会学科環境・コミュニティ創造
専攻教員)



毎年越冬にやってくるテントウムシ。自然科学棟2
階にて撮影（2011年10月28日）。かつては自然科
学棟だけで10万2038匹ものテントウムシが集まっ
ていたという記録がある（『ナチュラリスト入門
秋』、岩波ブックレットNO.152）

2011年11月12日、2号館消毒に伴い、死亡または落下した昆虫類等の数(2011年11月16日)														
場所	ナミテントウ					カメムシ類	ハエ類	カ類	ガ類	ゴミムシ類	クモ類	カウント者	カウント日	採取日
	黒地に赤星	赤地に黒星多	赤地単色	黒地に赤星多	小計									
2階	210	26	0	4	240	1	0	2	0	0	1	I.K.	11月14日	11月14日
2階トイレ	746	128	2	11	887	3	2	0	1	0	2	I.K.	11月14日	11月14日
3階	42	7	0	0	49	0	0	0	0	0	0	S.Y.	11月14日	11月14日
3階トイレ	161	28	0	0	189	0	0	0	0	0	0	I.K.	11月15日	11月14日
4階	1,201	240	0	48	1,489	2	0	0	0	0	1	S.Y.	11月14日	11月14日
5階	856	136	7	16	1,015	15	5	0	0	0	1	I.K.	11月14日	11月14日
5階トイレ	130	19	2	0	151	1	0	0	0	1	0	S.Y.	11月14日	11月14日
6階	580	65	2	8	655	4	2	0	0	0	0	I.K.	11月16日	11月14日
計	3,926	649	13	87	4,675	26	9	2	1	1	5			
1階はすでに昆虫類を含むゴミを処分してしまったため、今年のデータはない。 清掃の方のご協力のもと、掃き掃除により集まったゴミを回収いただき、カウントした。生死の別は判別せずカウントした。														



知り合いの大工さんにつくってもらった特製の脱粒機。採れたものは唐箕で選別した後、さらに水で洗う。いいエゴマは油分が多く水に浮く



エゴマのある暮らし

10月、春から育ててきたエゴマがいよいよ収穫のころを迎えた。収穫はどのようにすればいいのか。食べかたも気になる。エゴマの種をわけていただいた、都留市鹿留^{ししどめ}にお住まいの志村久恵さん（54）にお話をうかがった。

10月末、エゴマの刈り取りをおこなった。エゴマの茂みに近寄ると、それだけでなんともいえないかぐわしさに包まれる。食欲をそそる、どこかあまやかでスパイシーな香り。花のあとの茶色が殻を下からのぞくと、やわらかな毛の向こうに白っぽい粒が今にもこぼれ落ちそうにのぞいているのが見える。慎重に摘み取っていく。

久恵さんは、昨年一人でエゴマを育てて（今年の5倍くらい広い畑で）、あれだけ忙しくて大変だったのに病気になるなかったのは、エゴマの香りのおかげかもしれない、と言っていた。夏、疲れると、エゴマの茂みのなかに入って休む。そこは涼しくてよい香りがして、別世界だったそうだ。

久恵さんが今育てているエゴマは、お父さんから引き継いだものだ。さかのぼれば、おばあちゃん、ひいおばあちゃん、さらにはその先のご先祖様から、代々受け継がれてきた種だ。

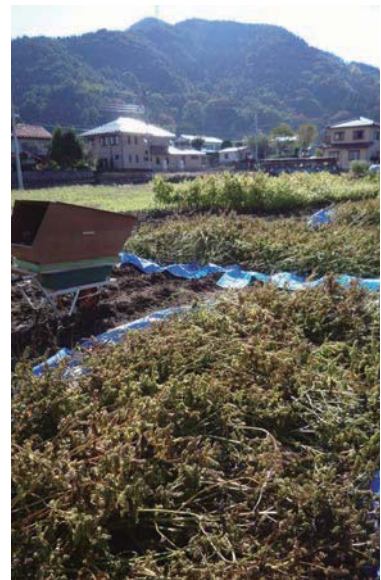
久恵さんが子どものころ、エゴマはお客様が来たときのおもてなしのときにしか食べられない、特別なものだったそうだ。なにしろ収穫に手間がかかるので、ほんの少ししかつけない。お父さんはそれを一升瓶に入れて保存していて、おばあ



脱粒後、広げて除虫。水で洗った後さらに充分に天日干し。食べてみてできあがり判断する。よく干すことで香りとおいしさが増す



庭に面したエゴマ畑（右）。刈り取りの見極めはいつもハラハラだ。遅すぎると種が落ちてしまうし早すぎてもいけない。おおかた茶色になったら脱粒のころ





久恵さんのエゴマ料理をいただいた。煎りエゴマをルッコラと混ぜ込んだおむすび、漬け込んだエゴマの葉でまいたおむすび2種、茹でキャベツ・炒り卵・煎りエゴマをポン酢で和えたもの。ぶちぶちとした歯触りと爽やかな風味／右：エゴマを煎ると部屋中が香ばしい匂いで満たされる。「この匂いも、おもてなし」

熟したエゴマの粒。エゴマの味はたとえるならクルミに近いという。久恵さんのエゴマは上品な味と香りが自慢だ

ちゃんが「エゴマおはぎ」にした。煎りエゴマを搗すって砂糖と混ぜ合わせ、半分くらいついたご飯にまぶした「エゴマおはぎ」は、絶品だったという。「エゴマおはぎ」が格別だったという話は、わたしがエゴマを育てている畑のそばに住んでいるかたからも聞いたことがある。いったいどんな味なのだろう。

特別なときだけではなく、ふだんから思う存分エゴマを食べたい。これが久恵さんがエゴマを育てている、そもその思いだ。今では採れたエゴマを2ℓのペットボトルに入れて冷蔵庫に保存し、毎日の食卓にふんだんに使っている。

久恵さんは黒い髪をバンダナでまとめて、よくしゃべりよく笑うきれいな人だ。

この日、エゴマ畑で収穫の時期や方法についてひととおりお話を聞いたあと、お家に入ってハーブティーをいただきながらお話をし、エゴマを使ったお昼ご飯をいただいて帰った。本当に楽しいひとときだった。エゴマの魅力もたつぷりうかがって、いつそうエゴマは気になる存在になった。

自分たちで刈り取ったエゴマも、あとは選別をすれば食べられる。どんな味がするだろう。今度は教えていただいたレシピで「エゴマおはぎ」をつくってみよう。



エゴマ（シソ科シソ属）
東南アジア原産の一年草。9月ごろ白い花をつける。1つの花から4粒の種子が採れる



（左から）久恵さんの庭には色とりどりの花が咲き乱れる／ハーブがたくさん。ジャーマンカモミールは花を乾燥させてお茶にするとおいしい／ルッコラ。間引いて食卓へ／シカクマメ。水色の美しい花をたのしむ

香西恵（社会学科3年）＝文・写真

「つくる」をみつめる

—第2篇—

型のない作品

4月に都留市つるのフラワーショップ「リエール」に立ち寄ると、ハンドメイド展が開催されていた。そこに飾られていた堂々とそびえる「風の塔」。自然木の形をそのまま活かした作品の姿に心惹かれた。自然や廃材から材料を取ってものづくりをする人がいる。「とる」ことからものづくりが始まっている作品を見るとなにが見えてくるのだろうか。

前澤志依（国文学科2年）＝文・写真



大月市の「ギャラリー民」に現在飾られている作品。正面にある3つが「風の塔」



ローリエの枝からつくったピン

10月22日、待ち合わせの時間に「リエール」にいらつしやったのは、チューリップハットと口髭が印象的な原健吾さん(52)。原さんは、30年近く油絵を描きつつ、最近では自然木や廃材でものづくりもしている作家だ。

「再生」

原さんは「再生」という言葉を掲げて活動をしている。ものづくりの材料のほとんどが自然木から取ったり、建造物などを解体して出た木の廃材をもらったりしたものだ。知り合いから「廃材があるから取りに来て」と連絡があると、使う予定がなくても、とりあえずもらいに行くという。

「もらっても使わない廃材とかは、家の薪ストーブで燃やせばいい。燃やして灰になったものは、畑の肥料にする。だから捨てるものはない」

身を乗り出して力強く言い切る姿から、それが原さんの信念のひとつなのだと感じた。

また、原さんは材料そのものの味を大切にしている。ニスを塗ったり、ヤスリで必要以上削ったりすることはあまりしない。原さ

んお手製の、ローリエの木からつくったピンがある。「リエール」のお店の前に植えられているローリエの枝を剪定して、適当な大きさに切り、穴を開けてピンを差し込んだものだ。穴に接着剤等は使っていない。

廃材を使うのも原さんのこだわりのひとつ。切ったばかりの木は暴れる(伸縮する)ので、落ち着くまで乾燥させなければならぬという。廃材だと何年も前に切られた木なので、いい感じに落ち着いているし、乾燥もしているという利点があるらしい。それに、元はなにかの一部だったこともあり、廃材の一つひとつに今まで材として歩んできた道のりがあり、それぞれの持ち味が違うのだ。

原さんが考える「再生」

には、廃材や自然木からもをつくることで、これまでその木々が辿ってきた道のりの上に、違う活かしかたという新しい道をひらく意味があるのだろう。いらないから終わりと、というわけではない。

コーディネット

油絵を描いていた原さんが自然木や廃材を使つてものづくりを始めた出発点は、額縁をつくったことにある。描いた絵に似合う額縁が欲しいと思つた原さんは、額縁も自分でつくつたほうが納得のいくものができる考えたのだという。

「絵か額縁、どちらかが目立つたら、せっかくのものが活かせなくなる」とおつしやる原さんは、ものづくりをするとき、作品を「コーディネット」するという意識が強い。そう表現する感覚がなかった私はどういう意味なのかと尋ねた。



作品名「釜中にあそぶ」



原さんはこの枝を「泳がせたい」

「服とおなじで、一着だけじゃその服の持ち味が出ないじゃん。なにかと組み合わせることで初めて服の魅力が発揮される。額縁とかもそれとおなじ感じかな」

そうおっしゃる原さんの表情はどこか真剣だ。「この絵に合った額縁がほしい」という注文があれば、まずはその絵とじっくり向き合い、

どういう額縁にしたら絵も額縁も引き立つのかを考える。「つねにハードルは自分自身」と考えている原さんは、依頼された相手の要望を聞きつつも、最後に自分が納得いく形になるまでつくりあげる。そうして初めて作品の「コーディネート」が完成する。

自由な発想

同日、都留市大幡^{おほはた}の原さんのご自宅兼アトリエの「閑月洞^{かんげつどう}」にうかがった。作業場にはつくりかけの額縁や描きかけの絵、木端や小道具などがたくさん置かれていて、秘密基地のようだ。作業場の隅に段ボールがあり、いくつかの枝がまとまって入っていた。原さん



作品を見つめる原さん

はそのなかから一本の枝を取りだして「これを泳がせたいんだよね」と枝を左右に動かしながら呟く。作品として、魚のように泳がすことができないかを考えているという。陸にある枝を水中にもつていくという発想がおもしろい。

「(心がけていることは)自分を飽きさせないこと。飽きつぱいから、おなじものを30個つくっていわれたら、できないって言っちゃうと思うのね。それから、タブー(禁止事項)をつくらない。自分でここまでつて天井をつくっちゃうと、結局は型通りにしなくちゃいけないから、おもしろくないよね」

最近の原さんは絵を描くときにキャンバスで描かずに、板に描くことが多いらしい。「キャ

ンバスだと四角い形が多いけど、板だったら絵に合わせてすぐ形を変えることもできる」という原さんの考えは、絵画といえば四角い形というイメージが強かった私にとって、とても衝撃的だった。

原さんにとっての「つくる」は漢字で表すなら「創る」と書く。新しいものをつくりだす「創造」の「創」。だから型にとらわれない原さんの作品はどれも斬新だ。

材を取ることから始まる作品は、「材をどうとらえるか」から「つくる」が始まっている。たとえば、ドングリを拾ってよく観察してみる。ドングリを一つ取っただけでもコマになったり、顔になったり……視点をちよつと変えるだけで発想はどこまでも広がり、いろいろなものをつくることができる。そう思うと、「つくる」ことがますます楽しくなつて、何でもつくれそうな気がするのだ。

原健吾さん プロフィール

1959年生まれ。長崎県出身。本学の卒業生でもある。80年に初の個展をおこなう。現在、都留市・三ツ峠山麓にて油絵を描くかわら、オブジェ・額縁の制作もしている。子どもたちのための出張アート教室も展開中。

おわりに

「とる」。
この言葉を切り口に秋を見てみたら、
とって終わりじゃない、
「とる」ことから何かがはじまることがわかってきました。

木の実を採れば、何の実か調べたくなる。
暖を取れば、あたたかい空間が広がる。
写真を撮れば、その景色がずっと形に残る。
記録を取れば、生きものやまちの変化がよくわかる。

とったものとじっくり向き合くと、
視野が広がったり、学びが深まったり、
自分自身の成長につながるものがたくさんありました。

ほかにはどんな「とる」があるだろう。
とって見つめるその先には何があるだろう。
これからもその答えを探しながら、
私たちは秋を満喫するのです。



起き上がる朝



長きにわたる教員生活。それを終えたらリフォーム講座や詩友会の中心に立ち、油絵、水彩と趣味でも大忙しなのにハツラツとした笑顔が素敵だ。——「ね？ おもしろいでしょ！」今号から数回にわたって、遠藤静江さん（79）のお話をお伝えしていきます。今回は遠藤さんが和服リフォームを始め、たきつけを、ご紹介します。

今

「リフォーム」って呼ぶけど私が子どもころからすでに、着物を解いて、子どもの服を作るっていうのは当たり前だったのね。だから、別に不思議ではなかったの。で、たとえばお嫁に来る時に「腰巻き」っていうのがあるじゃない、着物の下にする。あんなのだってほら、いい生地でしょ。私の母のもね、オレンジ色のいい腰巻きだったの。そしたらそれは、学芸会する時のワンピースに縫ってくれたよね、母が。それでこんなところ（襟の辺り）にちよつとレースをつけてくれたりね、あとオシャレにね、イチゴのボタンをつけてくれたりね……。ちっちゃいころ着たものはみんな覚えてるよ、作ってくれたものだから。あの学芸会の際はこういうの、この時はこういうの……最後には帯を解いて

ズボンを作ってくれたのとかね、そういう記憶がいっぱいあるのね。

ほんとによく縫ってたもんね。それを見ながら、ほら端布^{はづれ}が出てくるでしょ？ それでお人形さんの服を私が縫ったりしたのね。当時は小学校の3年生から「裁縫」っていう授業があつたのよ、学校の授業で。5年生になればワンピース縫ったよ。そういう時代だったでしょ。だから、針を持つこととか、もう当たり前だったのよねえ。自然に。16歳でスーツ縫いましたよ。12、3歳の時につけた「洋裁」のノートそのままとつてあるんです。その時はノートつてすぐ貴重だったの。洋裁のなんてそれに、なかなかないのよね。（洋裁ノートをを見せてもらう）これを見ながら、一生懸命、自分で作ったの。だからこれが、

私の洋裁のルーツ。一番きちんとしたね。ここから始まったわけ。

ダンスから顔を出した、母の想い

それで、「リフォーム」ってやり始めたきつけ！ それは、私の妹が、私の家を見て、いろんな趣味の道具がいっぱいあるのを見て、「もしこのまま私が死んでしまうと、あと子どもたちがこれを片付けるのがえらいから（大変だから）、今のうちに片付けた方がよいよ」って、私が70歳になったとき。それで私もふと「そうだな」って思ったわけ。で、たまたま自分のダンスを引き出してみたら、そのなかに、母が私に残してくれていたものとか、たくさんあつたわけ。ついで、私、私が縫い物をするから、母が亡くな

……(略)……

丹念に織り上げられ

三丈のみごとな内織りとなった

母の手に渡り

ねんねこばんでんに仕立てられた

私の弟を予守り 私の娘を予守り

ご用を済ませたはんでんは

母の手で丁寧に解きほぐされ

接ぎ合わされ 京染めに出された

黒字に紅と銀のかすり模様

の反物に生まれ変わり

「昭和40年5月17日くすのき」

と片置き札をつけたまま私に手渡されたが

三十余年 箆笥の底で眠らされたままだった

祖母が他界し 母が他界し

蘭玉のなかの虫がはるか彼方から私を責める

私は未熟な手で上着を縫い始める



つたときにみんなが「あんたがもらえ」って
言って寄越したわけ。で、私も母のものだから、
パツなんて捨てられないし、もらつてきた。
それで(タンスを)開けてみたときに、
「ああ、これは母が遺してくれたものだから、
なんとかしなきゃね」ってフツと思つたとき、
一番はじめに作つたのがね、あの、「作務衣」
だったの。

(作務衣を見ながら) 一番先にあれ(リフォーム)したのがこの布なの。これがね、昭和18年ごろね、私が小学校5年生の時に、これはこの色じゃなかったの。これはブルーの格子の、赤ちゃんをおんぶするときの「ねんねこ」だったの。赤ちゃんをおんぶするときの着物のようなものだったの。これで、私の弟をおんぶするときに「おおいばんてん」って言うんだけど、それを着ていたの。ところがその子が大きくなつてから、半纏はいらなくなつちゃつたの。そして、それはどちらかというと、外出用の半纏にしておいたの。だからきれいだつたのね。それで、跡取りがお嫁さんをもらつて、着てくれると思つたら着てくれないの。流行らないから。そしたら、「京染め」に出したわけ。全部解いて。そうして

染め直しをしたのがこれなの。

その時ここにね、「くすのき 昭和40年5月17日」にこれを染めに出したわけ。で、この札が付いていて、反物になつたものを、私にくれたわけ。これは「くすのき」っていう柄なのよ。(札の)ここにね、「小林静江様」って、私の名前(旧姓)が書いてあるの。母が、私にくれるようにしたわけ。で、私はこれをね、8年前まで、タンスの底へ、置いていたの。これを引っ張り出したときに、これは元々母が私にくれようと思つていたんだなあと、それで私は、母からもらったこれを、そのまんまにしといちゃいけないからつていうことで、これを作つたの。その時はどちらかっていうと、洋服つていうより着物に替わるものをつくろうと思つて、これを作つたの。



遠藤静江さん
(えんどう・しずえ)

1932年11月23日生まれ。1953年から1989年まで小学校の教師をされていた。その後、リフォームの講座を開きファッションショーをおこなったり、都留詩友会を発足させて詩誌『樹』を年に6回発行したりと多岐にわたって活躍している。好きな食べものは中華料理と甘いもの。花(サザンカ)と題字は遠藤さんによる。

上の写真:「くすのき」の作務衣と札



藤本さんの作品（右上：カキ、右下：ビワ、左：ザクロ）

先生を訪ねる

第3回 道を究める人

「芸術の秋」というけれど、たしかにこの季節特有の落ち着いた雰囲気は、何かに打ち込むにはちょうどいい。

都留の先生を探すこの旅も、良い出会いがありそうだ。

今回お訪ねしたのは、都留市古川渡^{ふるかわど}で書道教室を営み、みずからも書家・画家として活躍されている藤本あや子さん（62）。

私も小学生のころ、書道をやっていたことがある。どこか懐かしい気持ちを抱きながら、書道教室にお邪魔した。

雨の日の書道教室

10月21日、天気が悪さも相まって午後5時にはもう辺りは暗くなっていた。富士急行線^{かせい}禾生駅^{かせい}から赤坂駅へ向かって15分ほど歩く。ご自宅の正面に建てられた小さな建物が、藤本さんの書道教室だ。雨に混じって墨の匂いが微かに漂ってくる。

入り口の引き戸を開けると、途端に外の寒さを忘れさせるようなぎやかさが私を包む。活気のある中心にいるのは藤本さんだ。ぱつと明るい笑顔、黒の洋服の上に羽織った縞と水玉の柄のシャツ、はきはきとした口調。その姿は、若々しいエネルギーに溢れている。「お願いします」。ある生徒が藤本さんの机にやってきて、自分の書き上げた書を差し出す。藤本さんはそれに朱墨で添削していく。軽やかな手つきは、まるで風が吹いているかのよう。「ここは大きく右上にぐうつと引つ張っていかないと」。藤本さんの指摘は簡潔だ。一度に多くは求めないし、長々と説明もしない。生徒は納得したような、まだわからないような複雑な顔で書と向き合いながら席へと戻っていった。そのうち書き直した書を

手に、もう一度生徒がやってくる。書を受け取る藤本さんの表情が真剣なものになる。緊張の一瞬。「うん、よく書けてる」。満面の笑みで大きく二重丸を描く。生徒はほつとしたように、ありがとうございます、と言った。この教室は、毎週金曜日の午後4時半から7時半まで開かれている。そのあいだに学校の授業を終えた小学生や中学生がやってきて、1時間ほど練習をして帰っていく。1時間という目安は、子どもの集中力を考慮して決めたものだ。「学校の授業も45分くらいでしよう。それ以上やらせても『もういいや、飽きた』って字にでてくるよね」

藤本さんが書道教室を始めたのは20年前ほど前。主婦として家庭を支え、夫の仕事の手伝いをするかたわら、この場所で子どもたちの成長を見守ってきた。

「いろいろな子がいるよね。集中できる子、飽きっぽい子、1回注意して直る子、すぐに直らない子……。でも、みんな素直だよ」
現在は昔に比べると勉強に力を入れている家庭が増えた、と語る。字が上手くなつてほしい、落ち着きを持たせたいという思いを込めて書道を習わせる親は多い。けれど、学年

が上がり忙しくなるうちに、数ある習い事の中から真つ先にやめてしまうのは書道らしい。それでも藤本さんは、書道こそ頭を使うものだと言っている。字をどのように並べるか、墨の黒と紙の白の配分はどのくらいか、考えながら筆を動かしていく。決して、時間のあるときのたしなみで終えられるものではない。

「身につけたものは落ちないし、何よりものができるとかっこいいじゃない」。藤本さんは時代の流れに対し寂しそうに笑う。うで、確固たる信念を持っているようだ。



生徒の書を添削する藤本さん

書の道、人の道

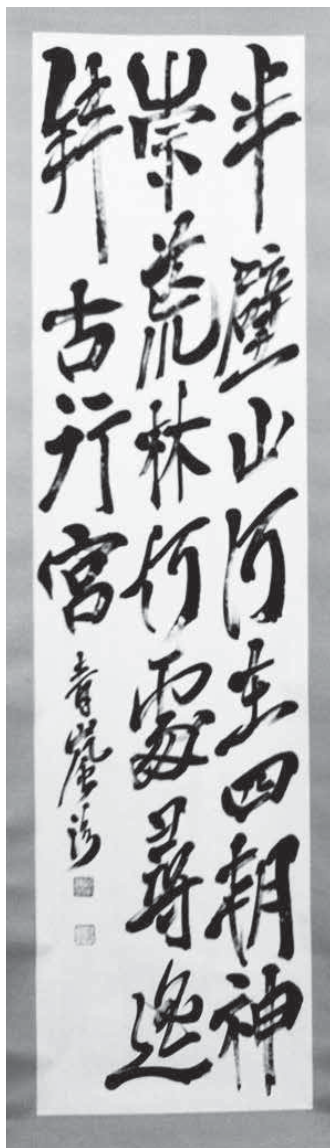
藤本さんは先生として子どもたちに書道を教えるいつぼう、書道家・南画家としての顔も持っている。雅号はそれぞれ青嵐・嵐光という。南画とは、墨の濃淡で表現する水墨画の流派の1つで、池大雅や与謝蕪村が有名だ。

藤本さんをお願いをして、いくつか作品を見せていただいた。見慣れた半紙ではなく、半切という大きな紙に書かれた書はそれだけで迫力がある。南画に限らず水墨画の作品自体を鑑賞するのも初めてのことだった。筆で描かれた一筋が木の枝にも葉脈にもなり、さまざまな表情を見せるのがおもしろい。

数ある作品のなかでひとときわ目を引くのが、元首相の犬養毅（雅号：木堂）の臨書だ。貫くような直線と、しなやかな曲線で表現さ

れた文字からは、力強い印象を受ける。臨書とは、お手本を見ながらできる限りお手本に近付けて書く書のこと。創作の書ももちろん書くのだけれど、藤本さんは「書いた人の心意気が伝わってくるような気がするし、その人のことを詳しく知りたくなる」と、臨書の魅力を語る。

筆をとる時どんなことを考えていますか、と尋ねると、藤本さんは少しの沈黙の後「何も考えてないねえ」と笑った。「生活していると嫌なこともあるけど、書に向かって集中してる時は全部忘れちゃう。こうやってストレスばかり抱えず生きていけるような時間があるといいんじゃないのかな。何も考えないと言っても、ただぼうつとしていてるのではない。意識を書だけに向けて、無心になるということなのだろう。



藤本さんが書いた犬養木堂の臨書

藤本さんは、自身も書道家であった父親の影響で書道を始めた。4人兄弟の長女という立場もあつてか、やらされているという気持ち強く、子どものころはそんなに書道が好きではなかったようだ。結婚してからは書道とは疎遠になっていた。けれど、長く続けたことは一度離れてもまたやりたくなっていたことは一度離れてもまたやりたくなってくるものらしい。父親が亡くなったことをきつかけに、もう一度筆を手にとることを決め、富士吉田市に教室を構えていた渡邊寒鷗先生に師事したという。

日々の忙しさに書道をやめたほうがいいのかでは、と考えることもあったが、家族の応援もあり現在まで続けてきた。「今思うことは、やっぱり書道をやっててよかった。書道を続けるなかで周囲の人から、品がいいね、と言われることが幾度となくあったという。その「品」とは一つの道を追求することで積み重なってくる、経験や人生観といった深み、自信のことではないだろうか、と私は思う。藤本さんの書道との道のりは平坦なものではなかっただろう。けれど、藤本さんの言葉には温かい響きがあり、今このとき書を楽しむ藤本さんの喜びが私にも伝わってきた。

「先生」を教えた先生

藤本さんは渡邊先生のもとで書道助手を務めながら、書道と南画を学んだ。南画は筆と墨を使う画法であるため、書道の技法と共通するところも多い。特に、藤本さんは渡邊先生から題材として竹を描くように強く勧められていた。その理由は藤本さんの書く線が強く勢いがあるからだそう。他人の書を真似て書くことは経験を積み誰にでもできるが、その人自身が生まれながらに持っている線の強弱はそう簡単に変えられるものではない。

渡邊先生から投げかけられた言葉は、今も藤本さんの書に強く影響を与えている。「先生にほめられた言葉って忘れないね」。ほめられるのは、誰からの言葉であっても嬉しいものだ。けれど、自分が尊敬し追いかけている人に認めてもらったことは、自分のなかでもっと特別なものになる気がする。

藤本さんに「教える」とはどういうことだと思えますか、と聞いてみた。ここでも、藤本さんは渡邊先生の言葉を紹介してくれた。「人にものを教えることには責任が伴います」腕に自信がなければ他人に教えることはで

きない。だからこそ、藤本さんは「人に飽きられないよう自分が向上すること」をつねに心がけている。そんな藤本さんの姿勢に心打たれてか、将来は書道の先生になりたいという生徒もいる。渡邊先生の考えは藤本さんに託されて、また藤本さんから書道教室の生徒へとたしかに受け継がれているのだろう。

今私たちに教えてくれる学校や習い事の先生にも、いつか教えを受けた先生がいる。当たり前のことだけれど、嬉しそうに語る藤本さんを見てみると不思議な気持ちになった。私から見た先生は、知識も人生経験も私よりずっと多くのものを持っている存在で、先生が生徒だったころのことなど想像したこともなかった。

あの先生にもこんなふうに憧れ、追いかける誰かがいたのだろうか。私が今まで出会ってきた先生たちの顔が思い出された。

リレーを繋ぐ

教えるということについて考えるとき、私は今見えている「先生と生徒」という構図ばかりを追いかけていたように思う。けれど、もっと視線を遠くへと向けてみると、生徒に

何かを教える先生の後ろには、もっと多くの人たちの存在があることに気づく。

生徒は先生から、知識や技術だけを受け取っているのではなく、生き方や考え方も受け取っている。そして、それらは直接教えてくれた先生だけのものではなく、先生がほかの人から受け継いだものでもある。教えることは、前の世代からバトンを預かり次の世代へと託すリレーのようなものかもしれない。

そう考えると、大事なものは教える立場ばかりではないと思う。先生から教えてもらいう、学ぶ側に立ったときに、きちんと受け止めようという気持ちがあれば「教える」ことは成り立たない。私に至るまでの繋がりを思えば、先生に教えてもらったことをおろそかにできない気持ちが生まれる。

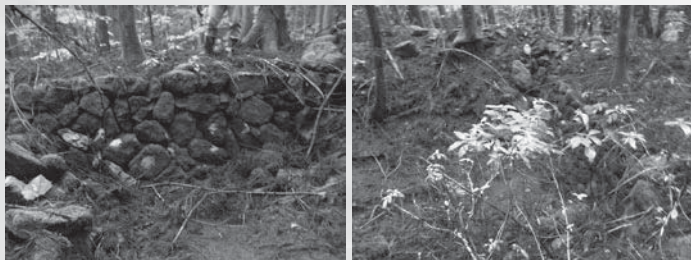
なるほど教えることは責任重大だ。けれど教えることで、学ぶことの可能性は広がっていく。学んだことが自分のなかだけで終わってしまふのは、受け取ったバトンの行き先が見当たらないようで、なんだか寂しい。誰かに伝えたい、と思ったとき、学ぶこと、究めることはもっと楽しくなるのだろう。

大澤かおり（社会学科3年） 文・写真

山で氷をつくっていた跡

小野に石組みでできた氷室がある。コンクリートは使われていない。教えてくれた男性は氷をつくっているところを見えていないが、母親の話を聞き、実物を見て、ここが氷をつくっていた場所なのではないかと話している。川沿いに製氷場、川から離れた斜面沿いに貯蔵スペースがある。石垣で囲われた場所に今はスギが立つ。

都留市小野在住・50代男性



どちらも製氷場のようす／左：石組み。コンクリートの使われた跡はない／右：上から見たようす

記憶のカケラ

たくさんの人の記憶を少しずつ拾い集めてみると一つひとつが宝物のようで、おもしろい。誰かの記憶にほかの誰かの記憶を重ねて、広がっていくともっとおもしろい……。土地で暮らしてきた方々の思い出、生活の跡、農作業、習わしをいくつか紹介します。

ヤマアカガエルを食べた

子どものころ、ヤマアカガエルを食べた。カエルの皮をむいて囲炉裏で焼いて食べていた。「(真木にある「ギャラリー民」にて)ここら一面田んぼ」だった。

大月市真木在住・60代男性

ヤマアカガエル
(アカガエル科)

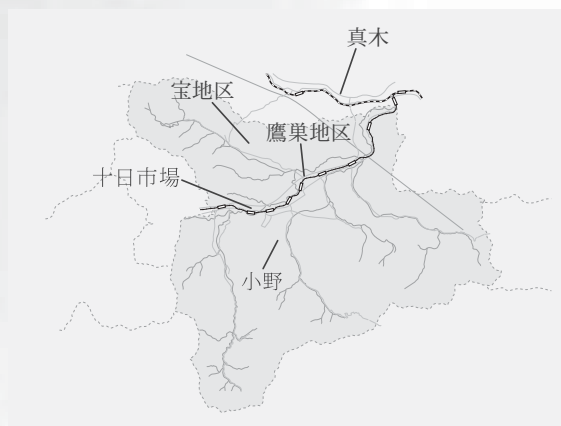
鼻先から尻までの長さ35～78mm。
平野から山地の森林とその周辺の田んぼに棲む



網を編んでいるのを見た

鷹巣地区(つる5丁目)では洪水の時に草鞋を履き投網^{とあみ}で魚を捕る。この川(河川敷を含む地形か)を知らないほかの地区の人は行けないらしい。投網は鷹巣地区の人が編む。網の長さは約50mとのこと。

都留市宝地区在住・70代男性



△都留市と周辺の地図

田植えは7月に終えればいい

昔はお米と同じ場所で小麦をつくっていた。だから田植えは7月15日までに終えればよかった。米・小麦の二毛作をする本誌編集部では今年は7月8日に田植えをおこなった。周辺の田んぼではほとんどの場合6月におこなわれる。



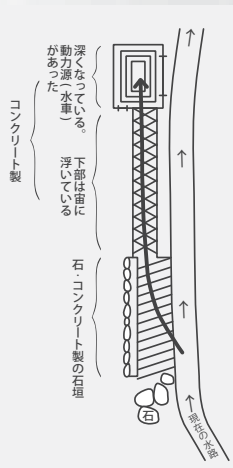
本誌編集部での田植えのようす

都留市十日市場在住の男性・年齢わからず

水力製材所の跡

戦前からの製材所は小野のあたりで3軒あった。水の流れを動力に使い、製材をしていた。製材に使っていた水路(コンクリートと石組み)は今でも残っている。

都留市小野在住の女性・年齢わからず



図と写真。左から右へ：水力製材所の跡を上から見たようす。小さい矢印が現在の水の流れて、太いものが過去の水の流れを表す。図で表した石組み・コンクリートの左側面は製材所をやめた後、埋め立てられたという／水路の入り口。水が流れている／石・コンクリート製の石垣／水路だったところには草が生えている



上：茹であがったまゆだんご／右：まゆだんごを供えているようす。カキの木に挿したまゆだんごを米袋に飾っている。このほか神棚などに飾る



小正月の習わしで「まゆだんご」をつくり供える。まゆだんごを挿す木はヤマボウシ、カキ、クリ。教えてくれたかたが山から挿し木をとっていたときはヤマボウシを使っていた。今はカキやクリを使うそう。「いいものをかきこめ」「くりまわりがいいように」とそれぞれ縁起を担いでいるという。

都留市十日市場在住・80代男性

まゆだんごの挿し木

林業を日のあたる産業に。



都留の山のことを仕事として関わっている人から迫ってみようと、10月25日に南都留森林組合を訪れました。今回は、南都留森林組合参事の小林卓也さん(40)の林業にかけの思いに注目しました。いったい、都留ではどのような林業が展開されているのでしょうか。2回にわたり森林組合についてお伝えします。

森林組合の事務所(2011.12.4)

組合再生への兆し

林業と聞いても、どのような仕事であるのかイメージしにくい。都留は山に囲まれた土地だが、どうやって手入れをされているのか気にしなくても暮らしていける。

しかし、見えないところで、「林業を日のあたる産業にしたい」と、林業を^{なりわい}生業にしている人が都留にいる。今回インタビューをした南都留森林組合参事の小林さんだ。

森林組合とは、山の所有者が組合員となつて出資する協同組合。南都留森林組合では、おもに都留市と西桂町、道志村、それに旧秋山村(現上野原市)の民有林を中心に山の整備をおこなっている。

事務所は都留市法能にある。大学から自転車^{車で}約15分。なかに入ると、林業に関する書類や作業現場の地図などが目につく。長く林業に携わっているのだらうと思い、小林さんと対面したが、小林さんはなんと2年前に森林組合に入ったばかり。小林さんだけではな

い。ほかの職員もほとんどが同期という。

森林組合は昭和58年に4つの森林組合が合併し今の形になるが、それ以降、赤字が膨らみ厳しい経営が続いていた。そのため、2年前に職員を公募し、体制をゼロから仕切り直したのだ。もちろん、林業のベテランが2人いるのだが、そのほかの職員はみな素人。さまざまな業界から心機一転、林業に飛び込んだ人ばかりだ。

新体制後の経営状況は徐々に回復。そこには、小林さんの素人としての感性とこれまで培ってきた経験が生かされていた。

「正直言つて、またかと。僕そんなことばつかなんですよ、今までの人生のなかで」と、これまでの人生を振り返る小林さん。これまで、ゴルフ場や家具の卸問屋など、廃業を迫られた事業の立て直しを図る仕事をしてきたそう。その経験を買われ、入社して3ヶ月で参事に抜擢されたというわけだ。

そもそも小林さん、当初は一次産業にまったく関心がなかったという。けれど、大月市に引っ越してきて、家族のことを考え身近に職を探すなか、偶然、森林組合で職員を公募していることを知った。1年間、自宅の田ん



細野山を望む (2011.12.4)



細野山の林道 (2011.12.4)



事務所のなか (2011.12.4)

ばや畑作業を経験しながら、「のんびりやっていけばいいかも」と、林業の世界に足を踏み入れた本音を語る。

地域に立ち返る視点

組織が一新されたあとの、森林組合の活動は目覚ましい。たとえば、旅行会社と提携して、都留市金井にある桂林寺^{けいりんじ}周辺の里山を整備し、観光客を招きいれたり、戸沢の裏山にドッグランや遊歩道を設けたりした。また、

地元の子どもの関わりも育んでいる。小学生がムササビの巣箱を山に設置する活動に協力したほか、荒廃した里山を開拓し、保育園児が山で遊べる空間づくりを手がけた。

「里山や地域に貢献できたらいいなと思うてやっつたんですね」と、事業づくりの動機を語る小林さん。静岡県長泉町^{ながいずみちょう}の出身である小林さんは、大月市に越してきた際、過疎化や高齢化の実情を目の当たりにし、子どもの将来が不安になったという。将来を見据えて、林業の分野から地域を明るくしていきたいとの思いは、同じ地域に暮らす一人として心強い。「地域を盛り上げながら、林業を再生させていきながら、林業を日のあたる産

業にしたい」。外からやってきた小林さんだからこそ、人一倍、地域に貢献したいの思いをもてるのだろうと感じた。

また、こうした取り組みを後押しするのが、杉本光男組合長^{すぎもとみつお}(75)である。「やろうと言ったことに関して、いいね、やろうと言ってくれる。それがこの森林組合の良さ」。職員の意味を尊重し、どつしりと構えている組合長がいるからこそ、森林組合は再生へと舵を切っていったのだろう。

見えない林業

「ふつうの業界に持ち上げたいというのが僕の願いですね。(そうすれば)いろんな人と出会えるし、いろんな民間事業体も出てきますし、森林組合もいろんな独自カラーが出てくると思うんですね。小林さんが言うふつうとは、昔ながらの体質に引つ張られず、長期的な経営視点に立ち、若い人でも参入できる仕事へと改変したいという意味だ。

私は、山がどれほど大切で、どのような関わり方があるのか分からなかった。小林さんも「林業は見えないことが一番よくない」と指摘する。農業は一年単位で成果が見える

が、林業の場合は、苗木を植えてから搬出するのに約50年かかる。そのうえ、山との関わりが少ない人は、山の仕事を見ることが難しい。これが林業の問題であり、課題でもあるという。「僕も林業の空気を出しているつもりはないんです。ふつうだつて空気を出していきたい」と、ごくごくふつうの仕事をする人として見て欲しいという小林さん。誰にとつてもオープンな仕事。その礎を創ろうと奮闘する小林さんの姿が、非常に頼もしく感じた。小林さんの話を聞いて、林業は、地域と自然とが一体の仕事だと考えるきっかけとなった。

自然を相手に仕事をすることは、きっと長い年月を要することだと思う。それでも、地域のため、人のため、さまざまな知恵をこらしながら、都留であらたな林業を模索している小林さん。林業が私たちの身近な現場であると感じる日もそう遠くないだろう。

次回 後編 都留の林業に迫る

今回は、森林組合がとりくむ細野山の集約化事業や、農と林を結ぶあらたな事業の試みをお伝えします。

崎田史浩(社会学科3年) 文・写真

おむすび屋さん



調理場に立つ鉄治さん。混雑時でもてきばきとおむすびを作る

都留市^{かせい}禾生にある「おむすびのおみや」のおむすびを食べた。米はふっくらとしていて、その一粒ひとつぶの食感を味わうことのできる、平たい太巻きのようなかたちのおいしいおむすび。独特のかたちとおいしさの秘密を知りたくなり、10月19日、お店を営む^{かしので}藤野鉄治さん（59）、^{みつこ}美津子さん（56）夫妻のもとを訪ねた。

店内に入って、一番はじめに目につくのが、30種類ほどの具が二段に分かれて並んでいるガラスケース。そこから好きなものを選ぶと、その場でおむすびを作ってもらえる。「はらす」や「なす味噌」が人気で、若いお客さんは「かつ」や「じゃんぼえび」などの揚げ物を注文することも多いそう。数種類注文してみたが、どれも美味しそうで目移りしてしまい、選ぶのにとっても時間がかかってしまった。個人的にはじめて食べた「わさび菜」が、香り豊かで塩気もちょうどよく、とても美味しかった。創業以来20年間、「おむすび」というシンプルな食べものひとつを看板にしてきた。地元の人々を中心としたたくさんのお客さんが訪れる理由のひとつは、具の種類が豊富であることではないかと思う。

鉄治さんが一番こだわっていることが、お米をはじめとした、素材の品質であるそうだ。もともとお米屋さんを経営していた藤野

さん夫妻が選り抜いたのが、新潟県産の有機栽培のコシヒカリ。たらこや鮭は北海道産、おむすびに巻く海苔は兵庫県産のものが使われている。おかずとして売られているコロツケの材料のじゃがいもや、この日並べられていた山菜おむすびの具は、地元で採れたものだ。毎年一度は産地に出向いて、試食し吟味して仕入れ先を決めるという。

おむすび屋の開業を決めた1991年、美津子さんは札幌の同業者のもとで、おむすびの握り方を修業したそう。見慣れないかたちをしたおむすびも、「おにぎり」ではなく「おむすび」と看板に掲げているのも、この同業者の影響であるという。

家庭の味

ガラスケース横には、数種類のお弁当やお惣菜が並べられている。唐揚げや卵焼き、野菜の煮物など、家庭料理の定番といえるも



おむすびの具。「ままけは」という味噌など、珍しいものが多い



持ち帰るお客さんが多いが、食べていく人のための席もある



店名・おむすびの「おおみや」の由来は、鉄治さんのご先祖が近江（現在の滋賀県）出身であったことから



おむすび1つに1.5膳分ほどのご飯が使われている



コロッケなどの惣菜

のばかりだ。お客さんは地元の人がほとんどで、常連も多いそう。朝食を買っていく会社勤めの人、学生、子ども連れの主婦など、年代を問わず、午前6時の開店から閉店の午後2時ごろまでのあいだ、さまざまな層の人々が訪れる。お話を伺うなかで、美津子さんは「家庭の、ふつうのお家でお母さんが作るようなものが多いなあ」と仰っていた。ほつと落ち着く、飽きのこない母親の味。老若男女を問わず訪れるのには、そこにわけがあるように感じた。

「若いころは煮物なんか味付けが全然だめだったけれど、今は長年の経験からくる勘を生かして、おいしいと言ってもらえるようになった。誰だつてそうなんだけとね」。どこかの家のお母さんの口から出てきそうなことばに、美津子さんが商売として料理していることを忘れてしまいそうになった。

お客さんを思う

どんなときにやりがいを感じますか、と尋ねると、「お客さんが美味しかったと言ってくれたとき」と返ってきて、はじめてこのお店を訪れた日のことを思い出した。お店に入ろうとすると、自動ドアは開かず、店内も暗い。定休日なのだろうか、としばらくお店の入り口の前に立っていると、「ごめんねえ。今日はもう閉めちゃったの」と声がする。振り返ると、バンダナにエプロン姿の美津子さんの姿があり、「ついさつき閉めちゃったの。あ、まだあるかもしれない」と続けてお店のなかに駆けていき、すぐにおむすびを手に戻ってきて手渡してくれた。ふいの出来事に、その日は帰宅してからもずっとほくほくした気持ちだった。

遠方に出向き、熱心に選んだ食材や、修

業して得た技法を生かした商品を、お客さんが認めてくれる。そのことももちろんだけれど、お客さんに喜んでほしい、という思いが根底にあるからこそ、そんなまつすぐな答えが返ってきたのではないかと、お話をうかがいながら考えた。「安全性や信頼は大事だし、おいしいものを食べてもらいたいから」。素材選びにこだわるわけを、にこにこ語る鉄治さん。食を提供する人間としての真摯な姿勢が伝わってくる。ことばだ。しかし、ほがらかな表情からは、それが鉄治さんにとって当然のことであると何われて、とても印象に残った。

選りすぐりの食材で作ったおむすびが食べられる、家庭的な雰囲気のお店。今まで知らなかった「おむすびやおおみや」を自分なりに表現すると、そんな風になる。この心惹かれるイメージは、藤野さん夫妻のたくさんの試行錯誤や、お客さんへの温かい思いのもとに成り立つものである。これから飲食店に足を運んだときには、出てきた料理がどんな思いで作られているか、それがどのように料理にあらわれているか、頭と心で味わいながら食べてみたい。そうすることで、食べもののおいしさはもつと深まるはずだ。



店主の古屋健一さん

思い出を

あつかう人

都留市上谷に「photopia」という写真屋がある。本学で写真部に所属している私は、これまでに何度かお店を訪ねていた。店主である古屋健一さん（54）は、いつも気さくに話しかけてくださる親しみやすいからだ。話をしているうちに、もっとこの人のことが知りたい、仲良くなりたいと思い、10月7日に思い切って取材をさせていただいた。

写真屋という仕事

古屋さんが写真屋を始めたのは、平成10年1月16日。コンピュータや画像を加工することが好きでこの店を開いた。そのころ古屋さんは40歳。それまでは、親から引き継いだパン屋を経営していたが、40歳は人生の半分であり、これからは自分の好きなことをしようという思いがあった。そしてパン屋の二軒隣

にあるお店で、写真屋を始める。2年前まではなんと、写真屋と同時にパン屋も続けていたそうだ。

「お客さんの思い出や気持ちを、大切にしている」。そう言って古屋さんは微笑んだ。写真は人々の思い出であり、その思い出をあつかうのが写真屋なのだ。

「もし家が火事になった場合、一番先に持ち出したものが写真だね。それはたった紙切れ一枚かもしれないけど、なかには大切な思い出がこもっているんだ」

この考えは、写真屋を始める前から自然ともち始めたそうだ。思い出という付加価値が、写真をさらに大切なものになっている。写真に込められた思い出は、色褪せることがないと私は思う。

人と人とのかわりを大切に

取材中、何度かお客さんが訪ねてきた。そのうちの一人は、古屋さんがおっしゃるには1年ぶりに来てくれたそうだ。お客さんの名前はもちろん、そのかたが最後にいつ来ていたかまで覚えていることには驚いた。古屋さんが近況を尋ね、会話が弾む。仲良く談笑す

る姿が印象に残っている。お店に来たお客さんはみな、古屋さんと楽しそうに話をして帰って行く。

その姿を見ると、古屋さんが積極的にお客さんに話しかけていることに気がついた。思い返すと、初めてお店に来た時、古屋さんは私に話しかけてくれていた。それは、かわる一人ひとりを、大切にしているからなのだろう。

また、地元の人だけではなく、大学生とのかかわりも豊富である。学生の相談にのることとはもちろん、引越しの手伝いまでしたことがあるそうだ。そんな古屋さんのもとには、卒業生が遊びに来たり、便りが届いたりする。人とかかわりを大切にしているからこそ、多くの人から好かれているのではないだろう



店内に置かれたお菓子

か。少なくとも私はすでに古屋さんのことが好きだ。

ふと店内にお菓子が売られているスペースがあることに気がついた。なぜお菓子を売っているのか疑問に思い、尋ねてみた。もともとはお客さんにおまけとして渡していたそうだが、誰でも買えるように売り始めてみたという。年配の方は、スーパーまで行くのもひと苦労だ。しかしこの店に置いてあれば、近所のお店からの帰りや写真屋へ来るついで、散歩の途中などに、孫にお菓子を買ってお土産にできる。そのため、袋はスーパーのレジ袋ではなく、パン屋さんのキャラクターが描かれた、子どもが好きなものであった。地域の人に少しでも喜んでもらえるように。そんな思いが伝わってきた。

古屋さんは、私たち学生のことを優しく見守り、応援してくださっている。私はまだ都留市に来て1年も経っていない。一人知らない土地で暮らしていくなかで、頼れる大人の存在はとても大きいものだ。この人に出会えてよかった、素直にそう思う。

「都留を第二の故郷にしてほしい」
古屋さんはそう話してくれた。4年間と

いう限られた時間のなかで、都留を好きになって、この地を満喫しないともったいないと私は思う。「親戚のおじさんのように思っ
てほしい」という古屋さんの言葉が、とても嬉しかった。

人とかかわりが私は好きだ。人の優しさ、あたたかさに触れると、何だか自分まであたたかい気持ちになる。

古屋さんと話して、気づけばぬくもりをたくさんもらっていた。かわつていく一人ひとりを大切にしていく。私も古屋さんのように、このぬくもりをみんなに伝えていこう。

水野孝英（社会学科1年） 文・写真



プリンターのインクやフィルム、アルバムなどもある



アパートへと続く電線の上にたたずむ三頭のムササビ。一番右が親だと思われる

身近で自由にふるまう生きものを見守る

狩野慶（ゆずりはら少年自然の里）＝文・写真

8月上旬、ムササビの巣穴（68号を参照）の真下に落ちているフンの変化に気づきました。正露丸ほどの大きさの見慣れたフンのほかに、ひとまわり小さいフンがちらほらと混ざっていました。ほかのムササビが巣穴に出入りしているのでしょうか。虫の鳴き声が賑やかで、ひんやりと少し肌寒くなった10月の夕暮れどきに、屋根裏に起きた変化を追いました。

10月7日、17時50分。屋根裏にライトを当ててみると、いつもなら赤い目が二つ光るところが、四つ光っています。よく見ると二つの目は小さく見えます。少しでも外のようなすを探ろうと競い合うかのように、二頭のムササビが巣穴から顔を見せていました。

18時過ぎ、まずは大きいほうのムササビが滑空して出巢します。巣から15mほど離れた南東の木に飛び付くという、おなじみの滑空コースです。こちらは昨年度から付きあいのあるムササビのようです。およそ2分後、今度は小さいほうのムササビが出巢しましたが、なんだかようすが違います。このムササビは滑空せずに、アパート



巣穴の下に落ちているたくさんのフン

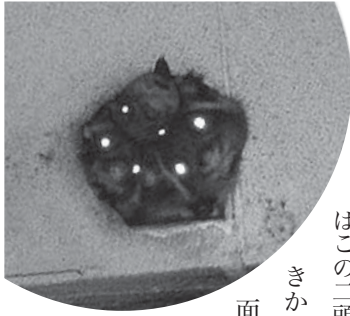
の外壁に張りつき、「ジャツ、ジャツ」と爪を外壁にひっかけながら横へと移動していきます。それから電線の上をつたって、南西側のサクラの木へと移りました。なぜこのような手間のかかる出巢をするのか疑問です。まだ滑空することができないのでしょうか。

大の字になって壁に張りつく姿はどこか人の姿と重なるところがあり、片手をいつぱいに伸ばしながら、ゆつくりとひとつひとつ移動していく着実な姿は忍者のようです。帰巢するときはとくに、この方法をとることが多いようです。巣穴に暮らすこの親子ムササビをしばらく観察してみることになりました。

じつは三頭？

部屋の窓を開けて網戸にしておく
と、屋根裏に限らず、近くに暮らすム
ササビの鳴き声が聞こえることがあり
ます。11月12日の夜9時過ぎのこと、
玄関先で鳴いているのかと思うくら
い、ずいぶん大きくはつきりとした鳴
き声が聞こえました。あまり聞くこと
のない「キュルル、キュルル……」と
いう鳴き声です。キーをまわして車の
エンジンをかけ始めているときのよう
な音に似ています。

屋根裏から顔を出す三頭



ライトを持ち、そつとドアをあけ、
ようすを伺つてみると5mほど先の地
面にムササビが一頭いました。ちよう
ど巣穴の真下あたりです。アパートと
サクラの木をつなぐ役割を果たしてい
る電線の上にさらに二頭。鳴き声の主
はこの二頭のように、体の向
きから判断すると、地
面にいるひとまわり
大きなもう一頭の
ムササビに呼びか
けているように見

えました。

その三頭は電線の上で合流した後、
電線からサクラの木に移り、奥の林へ
と枝づたいに移動していききました。た
だ、小さな一頭がどうしても電線から
サクラの木へと飛び移ることができな
いよう（ほかの二頭が渡つた先でし
ばらく待つていました）、20分ほど悩
んだすえに、電線をつたつて屋根裏の
巣穴へと戻つてしまいました。この姿
から、今回の三頭は屋根裏に暮らすム
ササビであるように思えました。観察
を続けていくと、11月14日に、確かに
屋根裏から顔をだす三頭のムササビの
姿を確認することができました。



壁に張りついて移動する

巣穴から同時に三つの顔が見えま
すので、ムササビそれぞれの違いを学
ぶのに良い機会となります。親ムササ

ビはほか二頭の子ムササビより、顔も
からだもやはり一回り大きく、必ず一
番最初に出巢します。いっぽう二頭の
子ムササビは耳に生えている毛の量が
多いように見え、さらに耳先の毛が少
し黒みを帯びているように見えます。

電線を渡る姿は一步ずつで、少したど
たどしい印象です。これまではどこで
どんなムササビに出会つても、一頭ず
つだったので比べることができず、は
つきりとした違いが分かりませんでし
た。いつも同じムササビを見ているよ
うな不思議な感じがしていたので、今
では少しだけすつきりした気分です。

とはいえ、これまでの観察から得た
経験を再び組み直す必要も出てきまし
た。南東の木への滑空コースに限られ
ていた親ムササビが、最近は南西への
コースもとることがあること、子ムサ
サビ二頭は出巢のさいに、滑空するこ
ともあれば電線をつたつてサクラの木
に飛び移ることもあることなどが分か
つてきました。比較的早い夜9時過ぎ
に、親ムササビが一度、なぜか巣に戻
り、そのあと再び一度出巢することも

あります。また、日没後すぐに必ずし
も三頭すべてが出巢するとは限らない
ようでした。子ムササビは、1時間ほ
ど観察していても顔さえ出さないこと
があります。

* * *

ふと思うのは、こうした身近な生き
ものの行動を記録に残したり、行動の
意味を考えたりしようとするのはなぜ
だろうということです。僕たちの何気
ない暮らしのすきまに巧みに潜り込ん
で、たくましく生き続ける生きものを
見守りたい、応援したいという思い。
なかなか味わえない自分自身のユニ
ークな経験として、記憶にことこまかに
刻み込みたいという思い。この二つの
思いが僕にとつて、身近な生きものを
見つめ続けるきっかけとなつていろ
こに気づいたのです。

彼らの行動の意味を決めつけずに
あらゆる可能性に考えを及ぼせて、ふ
りまわされながらも気ながに、屋根裏
のムササビたちを見守つていこうと思
います。

フィールド暦

10～11月に都留市で見られる生きものを紹介します。引き続き地域のかたからの生きものの情報を募集していますので、ぜひ、編集部までお寄せください。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



テントウムシの越冬

2011年11月4日 都留市田原

今年も自然科学棟にテントウムシが越冬にきました。初認日は10月24日です。



ツキノワグマのフン

2011年11月10日 都留市上谷

大学の裏山にツキノワグマのフンがありました。フンの中身はヤマブドウの実のようです。



オオムラサキの幼虫

2011年11月24日 都留市十日市場

観察小屋前のエノキの根元の落ち葉をめくると幼虫がいました。ここで幼虫が見つかるのは初めてです。



ツチイナゴ

2011年11月24日 都留市十日市場

ツチイナゴは草原に住むバッタのなかまです。成虫で越冬するそうです。



窓ガラスに衝突して保護されたハイタカ

大学キャンパスの生きものの情報

・アオマツムシ

10月6日～11月19日まで、キャンパスでアオマツムシの声が聞かれた。

・ジョウビタキ

10月28日、冬鳥のジョウビタキが渡来した。

・ハイタカ

11月24日、自然科学棟の窓ガラスにハイタカ（メス）が衝突した。この個体は地域交流研究センターで一晩保護し、25日の朝に外に放した。

センサーカメラが写した動物たち

中屋敷フィールドでは、赤外線センサーカメラを設置して動物の調査をしています。下の写真は、2011年6月と、8～9月に撮影された動物たちです。



アライグマ 2011年6月4日
中屋敷フィールドで初めて、アライグマが確認されました。本種は外来種で、在来種への影響が懸念されています。



ニホンジカ 2011年8月2日
農道になっている場所にカメラを設置すると、ニホンジカが写りました。



アカネズミ 2011年8月4日
左端が洞窟の出入り口になっており、このアカネズミは洞窟に入って行ったようです。



アナグマ 2011年8月5日
上のニホンジカが撮影された場所では、アナグマも確認されています。



タヌキ 2011年8月31日
雨の日、タヌキが何かをくわえてカメラの前を横切って行きました。



ハクビシン 2011年9月1日
ハクビシンは6月もこの場所で撮影されました。ここは、彼らの通り道になっているようです。

うら山図鑑 第12弾 「魚類」

魚類は、今から5億年ぐらい前に初めて地球上にあらわれた背骨をもった動物で、わたしたちのず～っと昔のご先祖様です。わたしたちの体を支える背骨や、手足のもとになるひれ、食べものを噛むためのあごなどは、大昔に魚類が獲得した体の仕組みです。現在魚類は、世界に25000種類以上いて日本にも約3600種類います。海がない山梨県には真水にすむ淡水魚が50種類ぐらいいて、都留市には約10種類いると思われます。

都留市で見られる魚類（淡水魚）を紹介します。

●小口尚良（東桂小学校教諭）＝文・写真



ニジマス（サケ科）

養魚場で飼われていますが、放流もされています。もともとは外国の魚です。自然繁殖もしている（川で卵を産んで増えている）と思われます。

コイ（コイ科）

飼っていたコイを放したものが、川も茂の堰堤などで見られます。

アユ（アユ科）

海で生まれ、川をのぼります。今はすべてが放流のアユです。釣られなかったものは秋になると黒くなり、川をくだりますが、ダムで行き止まりになります。

カジカ（カジカ科）

水のきれいな流れや湧水地のそばにいます。以前より川の水がきれいになったためか、最近では増えつつあります。

ヤマメ（サケ科）

溪流を代表する魚。イワナと同様に釣り人から人気があり、多くが放流されたものです。自然繁殖していると思われます。



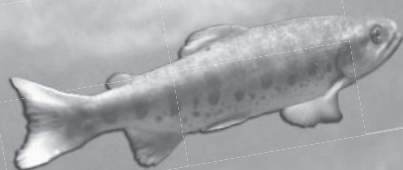
イワナ（サケ科）

ヤマメとともに溪流を代表する魚。ヤマメより標高の高いところにすみま
す。食欲旺盛。釣り人か
らの人気が高く、多くが
放流されたものです。



アマゴ（サケ科）

ヤマメの代わりに放流
されたものが自然繁殖
し、今でも見られます。
体の横に赤い点があり
ます。



アブラハヤ（コイ科）

川で一番よく見られ
る魚です。稚魚をメ
ダカと間違えている
こともあります。

ウグイ（コイ科）

溪流を除く桂川流域で
見られます。産卵期に
は色が大きく変わります。
以前と比べ少なくな
っています。



ドジョウ（ドジョウ科）

田んぼの環境が変わつ
ていくなかで、だんだ
んいなくなってきました。



ホトケドジョウ（タニノボリ科）

日本の絶滅危惧種。以前、地元の子
どもたちのあいだでいることが
知られていました。2009年
4月、調査により再び生息が確認
されました。

これらのほかに、ブラウントラウト、カ
ワマスが確認されています（ともに釣り堀
から逃げたものと思われる）。ほかにヨシノ
ボリ、ウナギ（大月や山中湖で放流された
もの）などがある可能性もあります。

Field Note News_{2011.9~11}

成瀬洋平さんの原画展

2011年9月3～11日まで、長野県松本市のカモシカスポーツで「Mountain Color」という^{なるせようへい}成瀬洋平さんの原画展がおこなわれるという情報をいただきましたので、初日に見に行きました。

成瀬さんは本学の卒業生で、在学中には「フィールド・ノート」の創刊のころから編集に携わっていました。現在は山岳雑誌に絵や文章を提供されています。こうした個展は、ご自身では3回目とのこと。会場では雑誌で目にしたことのある絵のほかに、黒一色で描かれたものもあります。8年ほど前から彼の絵を見ていますが、色の使いかたが変わったように感じました。私は数週間前に白馬岳を縦走したばかりでしたので、白馬の絵は感慨深いものでした。作品はやはり原画に触れるほうが良く、会場で作者と会話ができるのが個展の良さですね。(西教生)



2011.9.3 原画展のようす

オープンキャンパス・ツアー



2011.10.24 ツアーのようす

10月17日～28日、本学の秋季オープンキャンパスが開催され、本誌編集部員がキャンパスツアーのガイドを務めました。夏のオープンキャンパスとは違い、それぞれの担当が少人数のツアーとなったので、そのぶん夏の経験を活かしながらかより丁寧に大学や都留のまちを紹介することができました。(牛丸景太)

ビオトープ

11月2日と10日の両日、編集室前と図書館横ビオトープの手入れをしました。春、夏、秋と私たちの目をたのしませてくれたビオトープの植物も、冬が近づき来年の出番までしばし休息。雑草を抜いて土に混ぜ込んだり、剪定をしたり、ヒヤクニチソウやアサガオの種を取り、来年を迎える準備をしました。現在、編集室前のプランターでは、ビオトープに興味を持つ学生がホウレンソウを育てているところです。

(崎田史浩)



2011.11.2 編集室前ビオトープ

稲刈り



2011.11.3 脱穀のようす

11月3日、中屋敷フィールドで育ててきた稲を刈り取りました。

今年は稲の実りがよくありませんでした。水見がゆきとどかず、水を枯らして田をひび割れさせてしまったためです。刈り取り後、実のついたものを足踏み脱穀機にかけました。収量はわずかでとても残念でしたが、今年も無事稲の収穫を終えることができました。来年は水見が課題です。(香西恵)

麦づくり

精麦

中屋敷フィールドで作った小麦は、まいとし上野原市の小俣トシコさん（84）にお願いして小麦粉にしてもらっている。小俣さんは精麦に来た人の名前、その人がどこから来て、どのくらいの量を持ってきたのか、などを一冊のノートに手書きでまとめている。このノートは1990年の9月から書かれていて、あちこちから来た人の名前が並ぶ。小俣さんいわく、匂いの良くない麦にはクサイと書き、乾ききっていないものは製粉できないからと持ち帰ってもらうのだそう。

小俣さんのノートには本誌で初めて麦を持って行った日付けも記されていた。今年の出来はどうだろう。小俣さんは麦の粒が入った袋に手を入れ、片手で小麦をすくう。こするようにして一粒ひとつぶを四方へ散らし、よく見て香りを嗅ぐ。少し冷たくて湿った感覚のする小麦。鼻を近づけると、ほのかに麦の香りがした。「まあまあじゃないか。畑に植わっているときに麦が倒れて水につかったんじゃないか」。小俣さんにそう聞かれたけれど、麦刈りの時に麦はしっかりと立っていた。思い当たることと言えば、畑近くの小屋にゴザを敷いて干しているさい、台風がきていたことくらいだ。大型の台風だったから、小屋のなかに湿り気が入っていてもおかしくない。とはいえ、その台風が麦の出来に影響したかどうかの確信はない。

中屋敷では、畑でとれた麦の粒のうち来年に播く分だけ製粉しないで残しておく。「3年同じところで作ったら畑を替えるといいよ」。3年間、同じ畑に同じ麦を作ったら麦と畑の組み合わせを替えると良いそうだ。たとえば、いつもの畑で作っている麦は別の畑に播いて、別の畑で作った麦をこの畑に播く、ということ。二毛作をしているいつもの畑に加え、今回はそばにある小屋の正面にも麦を播いた。この違いが麦にどう影響するか、たのしみである。（石川あすか）



2011.10.29
麦をすくう小俣さん

来年に向けて麦播き



2011.11.6 麦播きのようす

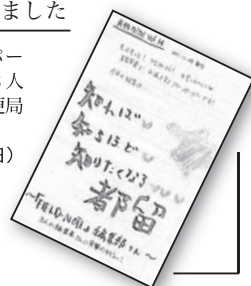
11月6日、少し肌寒い陽気のなか、来年に向けての麦づくりがはじまりました。^{わたなべむねお}渡邊宗男さん（80）に指導してもらいながら耕した畑からは、やわらかい土の良い香りがします。畑を耕し、麦や肥料を播いていくうちに寒さなんか忘れて夢中になり、あっという間に時間が過ぎていきました。少し播く時期が遅くなってしまいましたが、この冬を無事に越して、来年良い麦がとれるようにと願って播きました。今回は敷地を広げ新しい畑にも播いたので今後の成長を見るのがたのしみです。（小佐野めぐみ）

プチ Filed Note News

- 大学入り口にてトチの実拾い（9月10日）
- 秋の実探検隊（10月1日）
- 編集部写真撮影コンテスト（11月2日）
- 宗男さんにいただいたさつまいもで
スイートポテト作り（11月6日）
- 駅の展示替え（11月9日）

『月刊カミカミ』の取材を受けました

美容室「U・B」発行のフリーペーパー『月刊カミカミ』14号。本誌編集長3人のインタビューが載っています。郵便局など、市内各所でご覧いただけます。（11月29日）



編集後記

秋の夜長におもう



発行人
北垣憲仁〔16-17,40-41〕
統括編集者
西教生〔14-15,40-41〕
編集長
香西恵〔6-7,18-19,24-25,44-45〕
牛丸景太〔4-5,10-11,46-47〕
前澤志依〔20-25,42-43〕
編集
狩野慶〔38-39〕
石川あすか〔24-25,30-31〕
大澤かおり〔26-29〕
小佐野めぐみ〔44-45〕
北村彩乃
崎田史浩〔2-3,12-13,32-33〕
反保智栄
平井のぞ実〔34-35〕
藤森美紀〔38-39〕
持田睦乃〔1,8-9,24-25,48〕
水野孝英〔36-37〕
ロゴデザイン
工藤真純

〔 〕は編集担当ページ

FIELD・NOTE（フィールド・ノート）
発行日：2011年12月22日
発行部数：400部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

おなじ秋なのに、去年までの二年間とちがって妙にそわそわしてしまいます。あれもこれもやってないのに、夜に、秋に、そして大学3年の後半になっている……。気ばかり焦ってどうしようもないときに、衝動的に始めてしまう、小掃除。ふだん拭かない場所を拭いたり、思い切って要らないものを捨てたり。とてもすっきりして、小さな達成感とともに眠りに就くことができます。何も解決してないけど前向きになるので、何ごとも気の持ちようだよなあ、としみじみ感じます。（平井のぞ実）

ちからを抜いてみる。例えばカメラ。カメラを買ってから、シャッターチャンス求めて、昼間はいつだってキョロキョロしています。秋のよく晴れた日は、余計にそうです。色鮮やかな紅葉にはカメラを向けたくなるものです。しかし、夜は違います。ほどよい夜風にさらされ、星明かりに目をうばわれる。夜の写真は難しい。そう考えると、カメラには頼らず、自分の目だけで、いつまでも星を見ていられます。（崎田史浩）

ばんどはんを食べて一息ついたあと、机に向かうのがこの頃の日課です。虫の涼しげな声がちょうどいいBGMとなって、夜の作業はいつもよりはかどるような気がします。キーボードをばちばち叩くかたわらで、ちょこんと居座っているのがマグカップ。その日の気分で中身は変わります。ほうじ茶、ホットミルク、レモンティー、しょうが湯……。今日は何にしようか？ 長い夜のお供を考えるのも最近の楽しみになってきました。（大澤かおり）



● 次回予告

冬仕事 (仮)

寒くたって、
じっとしてられない。
冬には冬の仕事がある。
冬にしかできないことがある。

フィールド・ノート 72号
2012年2月 発行予定

FIELD·NOTE

no. 71

発行日 2011年12月22日（年4回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フォーカス・ミュージアム部門 『フォーカス・ノート』編集部

